



「お互い様」の気持ちが育む、

より良い地域づくり

### 大阪市ボランティア情報センター

「ボランティア」を広辞苑で引くと、（義勇兵の意）志願者。奉仕者。自ら進んで社会事業などに無償で参加する人。とあります。最近では、社会福祉や災害の時だけでなく、日常の様々な場面でボランティア活動に参加する個人や団体が増えてきています。

### 大阪のボランティア活動の歴史

ボランティアという言葉が使われるようになったのは、第二次世界大戦が終わってからのことです。大阪では、昭和23年（1948）に大阪市市民援護会、朝日新聞厚生文化事業団、大阪中央放送局（NHK大阪放送局）の三者が設立した大阪社会事業ボランティア協会が“ボランティア”という言葉を用いて、その活動を推進する組織の第一号でした。戦災により損壊した福祉施設の再建を手伝ってくれる人や、遊び場を失った子ども達の遊び相手などを市民にむけて募りました。

経済成長期には、海外渡航が自由化され住民レベルでの海外交流が盛んになったことと、公害などの社会問題に対する住民運動などを通じ、ボランティアという考え方が日本社会に浸透してゆきました。

社会事業ボランティア協会の流れをくんで大阪市社会福祉協議会は、昭和46年（1971）以降、市内各地でボランティアスクールなどの開催を支えました。その結果、現在では数多くの地域の福祉会館などで開催される「ふれあい喫茶」や「食事サービス」の取り組みは、多くのボランティアによって運営され、「ボランティア活動は敷居が高い」という意識を払拭し、地域福祉の「集いの場」が広がっています。昭和62年（1987）には大阪市ボランティアセンターを設立しました。主に支援を必要とする人とボランティア活動をした人とを個々に結び役割を担っています。

ボランティア意識が一気に高まったきっかけは、平成7年（1995）1月に発生した阪神・淡路大震災だと言われています。全国各地から被災地に、多くの人々が集まりました。平成7年は防災元年であるとともに、ボランティア元年とも呼ばれています。平成10年（1998）には、特定非営利活動促進法（NPO法）が制定され、市民が社会貢献活動に参加・参画しやすい環境が整いました。同年、大阪市ボランティアセンターは、大阪市ボランティア情報センター（OVCIC）に改称して、様々な分野の総合的な情報提供などを行うようになり、活動範囲を広げました。

大阪市ボランティア情報センター

○CVICでは次のような取り組みを行っています。手軽なフリーペーパー（ボランティア活動情報誌「COMVO」）の発行やインターネット上での情報発信、フォーラムの開催などを通じた、ボランティア・市民活動に関する市民の理解を求める取り組み。様々な活動相談、基金の運営による活動資金の助成、ボランティア保険の加入受付などを通じた市民活動の裾野を広げる取り組み。各区ボランティアビューローの支援・連携や企業・NPO等による地域貢献活動の推進支援、福祉教育・ボランティア体験学習の推進、災害時におけるボランティア活動の支援といった地域福祉を進める取り組みなどが主な事業です。

市民フォーラムおおさか

「市民フォーラムおおさか」は、20〜30人ほどの井戸端会議的なミニフォーラムを通じ、コミュニケーションを豊かにしてゆく取り組みです。平成20年度には、「我らがおおさか、ええとこ探し」など、50件を超えるフォーラムが開催されました。情報誌「COMVO」は、ボランティアやNPOの生の活動の紹介、ボランティア募集や学習会の告知、各区のボランティアビューローの案内など、ボランティアや市民活動に興味を持つきっかけとなるような記事を掲載しています。大阪市営地下鉄の駅や図書館などで入手することができます。

ボランティア活動の現状について、大阪市ボランティア情報センターの松尾浩樹（こうき）さんに伺いました。松尾さんによると、NPO法の制定で、ボランティアを含む市民活動の領域はスポーツ、文化活動、経済活動、消費者保護など、様々な分野に広がっているそうです。また、災害の被災地域における救援活動では、専門的なスキルを持ったボランティアの必要性も認知されるようになり、より現場に即したボランティア活動も行われるようになってきたとのこと。

一方で、「資格の有無に関係なく、誰にでもできる『何か』があります。それぞれの方が、個々のスキルを活かしてボランティア活動に参加してもらえよう、情報を発信しています。何よりも大切なことは、人と人との関わりを大切にすることです。『やってあげている』感覚があれば、人間関係が上手くいかなくなったりします。『お互い様』の精神のもと、一方的な関係ではなく、共に暮らしやすい社会を育てていく気持ちで参加してもらえたら」と、松尾さんは語ります。

企業の社会貢献活動

1990年代以降、認知されつつある言葉に「フィランソロピー」があります。慈善活動や奉仕活動と訳されるのですが、企業による社会貢献活動として使われる事が多いようです。最近では元マイクロソフト社のビルゲイツ氏が設立した基金が有名です。大阪では平成11年（1999）から、「中央区フィランソロピー懇談会」が活動しています。中央区に拠点を持つ企業が集まり、地域社会に根ざした社会貢献を考え、実行するための懇談会です。大阪市中心区社会福祉協議会に事務局を置き、定期的な会合や、一般の方を対象

にしたセミナーや企業見学会などを開催しています。製薬企業や金融機関など業種の垣根を越えて地域貢献を進めており、最近では地域に向く「出前講座」も好評です。

大阪市ボランティア情報センターでは、平成21年(2009)2月より、「Com-linkこむりんく」をスタートさせました。企業やNPOが持つ人材、物品、場所などの資源情報をWEBサイト上で公開し、そのマッチングを通じて地域貢献活動を進めようという取り組みです。企業のフィランソロピー活動を支援するシステムとして注目されています。

ボランティア活動が盛んになったのは、日本社会が豊かになった事、成熟してきた事の証です。一方で、隣家に住む人の顔も知らないという現状、近所での交流が希薄になってきている事も事実です。何か困ったことが起った時に頼れる存在となるのは、やはり隣人です。今回の取材で、OVCICのような機関が取り組んでいる仕組みを活用すると同時に、地域のコミュニティを再構築してゆく事の重要性を痛感しました。何かを話しかけることによって人の心が開き、繋がりが生まれてゆく。ボランティア活動は、さりげない声かけから広がってゆきます。



出前講座などを通して地域の社会貢献活動に取り組んでいる  
中央区フィランソロピー懇談会

大阪市社会福祉協議会

大阪市ボランティア情報センター

06・6765・4041

<http://www.osakacity-vnet.or.jp>

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞